

やはり俺の青春ラブコメには期待できない

黒い柱

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルの二次創作です。オリ主の原作沿いの作品になっています。なお、pixivにも投稿しております。

目次

腐れの神様、比企谷八幡	1
雪ノ下雪乃の毒舌はかなり鋭い	4
比企谷八幡は更正しない	7
結局、俺はビビりなままだ	13

腐れの神様、比企谷八幡

青春とは、素晴らしいものだ。これは主観的な意見でしかないが、かなりの人間にとってそうだろう。友達を作るのもありだろう。彼女を作るのもいい。部活で汗を流すのも。だが、そんな中でも一つ許せないことがある。

人と対立することだ。これは青春とは呼べないと思う。対立することで成長するなどナンセンスに他ならない。

人の歴史というのは対立によって形作られてきた。対立が拡大して戦争になるのだ。それは結局、甚大な被害をもたらす。

しかし、これには打開策もある。その中でももつとも有効な手段だと考えられるのは、対立の芽を取り除くことだ。つまり、最初から人と対立してしまうような本気の関係を作らないことだ。

高校生活ではこれを生かすことこそ、心の安寧を保つ道なのだ。

先ほどのようなふざけた作文を書いた俺、つまり南野薫は国語教師である平塚静先生に呼び出されていた。いや、呼び出されていたのは俺だけじゃない。隣の俺より少し背の高い男子、比企谷八幡も呼び出されていた。

平塚先生の矛先はまず、比企谷に向いた。

「なあ、比企谷。私が授業で出した課題は何だったかな？」

「……はあ、『高校生活を振り返って』というテーマの作文でしたが」「そうだな。それでなぜ君は犯行声明を書き上げてるんだ？ テロリストなのか？ バカなのか？」

平塚先生はため息をつく。いや、お前、何書いてんの、マジで。もしかして、リア充死ねとか書いたのかよ。

「先生、恐らくどちらもかと思えます。俺も人のこと言えないけど」「俺が呟くと、比企谷は睨み付けてきた。マジで怖いです。ごめんなさい、比企谷くん。てゆうか、かなり目が腐ってんな。」

その後は比企谷だけがひたすら怒られ続けた。俺も要らぬ口を挟

んで怒られたくはないので、傍観を決め込む。ときどき、比企谷が助けを求めるかのような目で俺をちらりと見ているが、それは見て見ぬふりをする。

「んで、お前の方も何だ、この作文は」

平塚先生が俺を睨む。

「当たり前障りのないことを書いたつもりですが」

「ったく、お前も比企谷とどっこいどっこいで腐ってるな。これを実践するということはどういうつもりだ？」

「俺は誰とも本気で関係を持ちたくないんです」

そう言うと、彼女はまたため息をつく。

「つまり、それはボツチということか？」

「そうですね。俺の作文から分かるように強い関係を築くつもりはありません。もしかして、先生も気持ち分かります？」

先生は未婚らしいので、軽く茶化してみると、先ほどより何倍も恐ろしい目で睨まれた。

「……静かにしないか？」

怖いです。そして、冗談です。ですから、顔面をパンチで潰すのは勘弁して下さい。

俺のその祈りが通じたのかは分からないが、先生はしばらく考えて俺と比企谷に言った。

「二人ともレポートは書き直せ」

「はい」

これは仕方ない。

「だが、二人の失礼な態度は私の心を確かに傷つけた。なので、君たちには奉仕活動を命じる。罪には罰を与えないとな」

少なくとも傷ついてはいないだろ。そんな様子で先生は言う。

「奉仕活動って……何すればいいんですか？」

比企谷が恐る恐る尋ねる。

「ついてきたまえ」

大丈夫かよ、これ。ついて行ったら、めちやくちやひどい目に合うんじゃないか。そう思って尻込みしていると、先生は俺たちを睨み付

けてきた。

「おい、早くしろ」

俺たちはついて行くしかなかった。

俺たちが連れていかれた先は人の少ない特別棟だった。拷問とかを受ける訳ではなかったからほっとしたが、奉仕活動とは一体何なのか。

比企谷は平塚先生と何やら話しているようだが、俺にはそんな余裕はない。というか、こんな状況でまともに会話できる比企谷のメンタルすごいな。

「着いたぞ」

先生が立ち止まったのは、本当に何の変哲もない教室。俺たちが黙って眺めていると先生はドアを開けた。

そのとき見た光景を俺は一生忘れないだろう。夕陽に包まれた教室の中で本を読んでいた一人の少女を。

それが俺や比企谷の雪ノ下雪乃の出逢いだった。

雪ノ下雪乃の毒舌はかなり鋭い

教室で本を読んでいた少女に見惚れてしまっていた俺は彼女の声で現実に取り戻された。

「平塚先生。入るときにはノックを、とお願いしていたはずですが」
いかにも良家のお嬢様を彷彿とさせるような立ち振舞いである。

「ノックしても君は返事をした試しがないじゃないか」

「返事をする間もなく、先生が入ってくるんですよ」

彼女の瞳は俺と比企谷に向けられる。

「それでそのぬぼーっとした人たちは？」

初対面の人にぬぼーなんて言えるなんて、どれほど度胸があるんだよ。

彼女は俺のことは知らないだろう。かなり地味な方だし。しかし、俺は彼女を知っている。彼女は二年J組、雪ノ下雪乃。

成績優秀、容姿端麗で文句のない有名人であるが、俺が会話したことはない。有名人であるほど近づくのは面倒なのだ。というか、理由がない。

「比企谷と南野。入部希望者だ」

平塚先生に促され俺たちは頭を下げる。

「二年F組南野薫です。よろしくお願いします」

「二年F組比企谷八幡です。おい、入部って何だよ」

それは思った。そもそも何部なんだ、こいつ。

「君たちにはペナルティとしてここでの部活動を命じる。異議反論抗議質問口答えは認めない。しばらく頭を冷やせ。反省しろ」

すごい勢いだな。よく噛めずに言えるものだ。

「という訳でこの腐っている二人に人との付き合い方というのを学ばせてやってくれ。それが私からの依頼だ」

「それなら、先生が殴るなり蹴るなりして躰ればいいと思いますが」

「私だつてできるならそうしたいが、今は肉体への暴力は許されていないんだ」

雪ノ下はすぐさま答える。

「お断りします。その男の下卑た目を見てみると身の危険を感じます」

その目線の先にいたのは、比企谷である。良かった、俺じゃなくて。安心したまえ。比企谷は目と性根が腐っているだけで、自己保身とリスクリターンの計算はかなりのものだ。南野は人と関わるのを恐れるビビりだから、お前に迷惑をかけることはないだろうな」

「何一つ褒められてねえ……。常識的な判断はできると言って下さいよ」

比企谷は呟くが、雪ノ下は納得したようだ。

「まあ、先生の依頼であるならば、無下にできませんし、承りました」

雪ノ下は心底嫌そうに答えると、先生は満足したように、

「そうか。じゃあ、後のことは頼む」

そう言つて帰つてしまった。

雪ノ下は読書が続けている。比企谷はぼつんと突っ立っている。何もすることはないので、俺はガムを口に放り込んだ。

どれくらい時間が経つただろうか。比企谷は雪ノ下をがるるるーっと威嚇し始めた。その威嚇するなよ。気持ち悪いだけだから。

「そんなところで気持ち悪い唸り声あげてないで二人とも座ったら」

「えっ、あ、はい。すいません」

雪ノ下の一睨みで野生化しかけた比企谷はおとなしくなった。と
いうか、言っちゃうんですね、気持ち悪いって。

それからさらに時間が経つた。お互いに話すことなどはない。黙って座っているだけである。だが、こんな生産性のない時間が嫌いという訳ではない。

「何か」

沈黙を破つたのは雪ノ下だった。それに答えるのは比企谷である。

「いや、悪い。どうしたものかと思つてな」

「どういうこと?」

「訳わからん説明だけでここに連れてこられたから」

彼女は不愉快そうに文庫本を閉じる。

「なら、ゲームをしましょう」

「ゲーム？」

「そうこの部が何か当てるゲーム」

それに答えたのは俺である。

「分かった。望むところだ。こここの部員は他にはいないのか？」

「ええ、私一人よ」

しばらく俺は考えてみた。正直、答えは二つまで絞り込めた。賭けに出てもいいが、片方を比企谷が潰すことに期待して先に答えてもらおう。

比企谷八幡は更正しない

自信ありげに比企谷が答える。

「文芸部か」

「へえ……。その心は？」

「特殊な環境、特別な機器を必要とせず、人数がいなくても廃部にならない。つまり、部費なんて必要としない部活だ。加えて、あんたは本を読んでいた。答えは最初から示されていたのさ」

俺はここで口を挟む。

「なあ、比企谷。ドヤ顔で推理したようだが、それは違うと思うぞ」

「じゃあ、お前の答えは？」

俺は雪ノ下に向き直る。

「俺が考えるに、奉仕活動部、略して奉仕部じゃないのか？ この部は」

そう言うと、雪ノ下は少し驚いたような顔をした。

「驚いた……。なんで分かったの？」

「基本は比企谷の推理と同じだが、俺と比企谷が平塚先生にこの部に連れてこられたのは、罰として奉仕活動をするためだ。だとしたら、文芸部なのに奉仕活動をするというのはどこか違和感を感じてな。まあ、お前が絶対に当たらないだろうと思うような表情だったから、普通の学校にないような部活だとも思ったが」

雪ノ下は軽く拍手して答える。

「その通り。持つ者が持たざる者に慈悲の心をもってこれを与える。人はそれをボランティアと呼ぶ。途上国にはODAをホームレスには炊き出しを。モテない男子には女子との会話を。困っている人には救いの手を差し伸べる。それがこの部の活動よ」

雪ノ下は立ち上がる。

「ようこそ、奉仕部へ。歓迎するわ」

あまり歓迎されてないように感じたのは俺だけだろうか。

「平塚先生曰く、優れた人間は憐れな者を救う義務がある、のだですよ。頼まれた以上、約束は果たすわ。あなたたちの問題を矯正してあ

げる。感謝なさい」

「こんのアマ……」

口が悪いぞ。比企谷。

「……俺はな、自分で言うのもなんだが、そこそこ優秀なんだぞ？ 実力テスト文系コース国語学年三位！ 顔だつていい方だ！ 友達と彼女がいらないことを除けば基本高スペックなんだ！」

「その辺にしとけ、比企谷。お前の態度は雑魚キャラのそれだ」

「お前はどうかんだよ？」

「俺か？ 俺は雪ノ下には及ばないが、全教科五番内には入っている。まあ、俺も友達と彼女はいないけどな」

雪ノ下は冷たい微笑みで俺たちを眺める。

「私が考えるに、あなたたちが独りぼつちなものってその腐った感性ややる気のなさが原因みたいね。まずは居場所のないあなたたちに居場所を作ってあげましょう。知ってる？ 居場所があるだけで星と腐って燃え尽きるような悲惨な最後から逃れられるのよ？」

腐った感性は比企谷、やる気のなさは俺に当てはまるのだろう。

『よだかの星』かよ。マニアック過ぎるだろ」

よだかの星？ 何それ？ 案外、国語三位は伊達にないかもしれない。

「意外だわ。宮沢賢治なんて普通以下の男子高校生が読むとは思わなかった」

「今、さらりと劣等扱いしたな？」

「ごめんなさい。言い過ぎたわ。普通未満というのが正しいわね」

俺も小さく笑って答える。

「悪化してんじゃん。まあ、俺も読んでなかったけどな」

「三位風情でいい気になっている時点で程度が低いわ。だいたい一科目の試験ごときで頭脳の明晰さを立証しようという考えがもう低能ね」

言うなあ。そう思いながら雪ノ下を見る。

「でも、『よだかの星』はあなたたちにお似合いよね。よだかの容姿とか」

「いや、俺読んでないから、そんな風にブスだと言われても分からねえよ」

比企谷は不満げに異議を申し立てる。

「それは俺の顔面が不自由だと言っているのか……」

「そんなこと言えないわ。真実は時に人を傷つけるから……」

「ほぼ言ってるじゃねえか……」

本当にひどい言い様だ。しかも、俺にまでダメージがくる。

「その辺にしとけ。比企谷だけならまだいいが、俺にまでダメージがくる」

「そうよね。でも、成績や顔のような表層的な部分に自信を持ってるところが気に入らないわ。あと、その腐った目も」

「もう目のことはいいだろ！」

「そうね、今さら言ってもどうしようもないものね」

「そろそろ俺の両親に謝れよ」

雪ノ下は反省したかのような表情になる。

「確かに、ひどいことを言ってしまったわ。つらいのはきつとご両親でしように」

「もういい、俺が悪かった。いや、俺の顔が悪かった」

比企谷はほとんど目を潤ませている。男子泣かすとかヤバいなこの人。

「さて、これで人との会話シミュレーションは完了ね。私のような女の子と会話できたら、たいていの人間と会話できるはずよ」

「いや、このシミュレーション、最初からハード過ぎるだろ」

雪ノ下は満足したように微笑む。

「これからはこの素敵な思い出を胸に一人でも生きていけるわね」

「解決法が斜め上過ぎるだろ……」

「でも、それじゃあ先生の依頼を解決できていないわね……。もっと根本的なところからどうにかしないと。例えばあなたが学校をやめるとか」

「それは解決じゃない。臭いものに蓋理論だ」

「あら、臭いものだっていう自覚はあるのね」

「ああ、鼻つまみ者だけにな、ってやかましいわ！」

「比企谷、全然うまくないぞ、それ……」

一応言っておく。雪ノ下はすごい表情で比企谷を睨み付けている。その静寂を破るように、ドアが開かれた。

「雪ノ下。邪魔するぞ」

「ノックを……」

「悪い悪い。まあ、気にせず続けてくれ。様子を見に寄っただけだからな」

そして、俺たち三人を見る。

「仲が良さそうで結構なことだ」

俺には仲が良さそうには思えない。

「比企谷は根性の更正と腐った目の矯正に、南野はやる気とコミュニケーション能力の向上に努めたまえ。それではな」

「ちよつと待ってくださいよ！」

比企谷が平塚先生を引き留める。が、その腕は捻られている。本当、容赦ないな、この人。

「なんですか更正って。俺が非行少年みたいじゃないですか。だいたいいいこ、なんなんすか」

「雪ノ下は君たちには説明してなかったか。この部の端的な目的は自己変革を促し、悩みを解決することだ。私は改革が必要な生徒をここに導くことにしている。精神と時の部屋だと思ってもらえばいい」

なにやら小声で食い下がった比企谷は平塚先生に睨まれている。

その様子に雪ノ下はため息をついた。

「雪ノ下、どうやら比企谷の更正には苦戦しているようだな」

「本人が問題点を自覚してないせいです」

雪ノ下は冷静に答える。

「あの……さつきから更正だの変革だの改革だの好き勝手に盛り上がってくれてますが、別に求めてないんですけど……」

「何言っているの？ あなたは変わらないと社会的にまずいレベルよ？ 傍から見ればあなたの人間性は他人に比べて著しく劣っているのだと思うのだけど。そんな自分を変えたいと思わないの？ 向上

心が皆無なのかしら」

雪ノ下の毒舌の鋭さがさらに増したような気がする。これ以上、言われるのはこちらまで心が痛くなる。

「比企谷、向上心も人間性もお前がこの先どうにかすればいい。とりあえず、この場は従っておかないか？ 一応、お前の言い分も聞いてやるけど」

そう言うと、比企谷は怒ったように言った。

「変わるっていうのは現状から逃げるために変わるんだろうが。逃げてるのはどっちだよ。本当に逃げていないならそこで踏ん張るんだよ。どうして今や過去の自分を肯定してやれないんだよ」

「……それじゃ悩みは解決しないし、誰も救われないじゃない」

雪ノ下の目がめっちゃくちゃ怖い。そんな険悪な空気を和らげたのは平塚先生の声だった。

「三人とも落ち着きたまえ」

俺は三人の中では一番落ち着いているつもりだったが。

「面白いことになってきたな。私はこんな展開が大好きなんだ。ジャンプっぽくていいじゃないか。こういうときは勝負で雌雄を決するのが少年マンガの習わしだ」

俺はため息をつくが、先生は構うことなく、続ける。

「これから君たちの下に悩める子羊を導く。彼らを君たちなりに救ってみたまえ。そしてお互いの正しさを証明するがいい。どちらが人に奉仕できるか!? ガンダムファイト・レディ・ゴー!!」

「嫌です」

雪ノ下がすぐさま答える。というか、例えが古いな。

「先生、年甲斐もなくはしゃぐのはやめてください。ひどくみつともないです」

その雪ノ下の冷静な言葉に先生は一瞬恥ずかしそうになったが、取り繕うように咳払いした。

「とっ、とにかく！ 自らの正義を証明するのは己の行動のみ！ 勝負しろといったら勝負しろ。君たちに拒否権はない」

「横暴過ぎる……」

比企谷の言葉は先生には聞こえなかったようだ。

「死力を尽くして戦うために、君たちにもメリツトを用意しよう。勝った方が負けた方になんでも命令できる、というのはどうだ？」

「なんでもっ!？」

恐らく変な期待をした比企谷が大きな声を出す。

「この男が相手だと貞操の危機を感じるのでお断りします」

「雪ノ下、こいつはそうかもしれないが、みんながそうとは限らないぞ」

俺は声をかける。

「さしもの雪ノ下雪乃といえど恐れるものがあるのか……。そんなに勝つ自信がないのかね？」

意地悪そうな表情で平塚先生が言うと、雪ノ下はむっとした表情になる。

「……いいでしょう。受けて立ちます。ついでにその男のことも処理して差し上げましょう」

負けず嫌いなんだな、この人。

「決まりだな」

ニヤリと平塚先生は笑う。

「あの……、俺の意思は？」

「君のにやけた表情を見れば聞くまでもあるまい」

少し比企谷もうなだれる。ちなみに俺にも拒否権はないらしい。

「勝負の裁定は私が下す。基準は私の偏見と独断だ。あまり意識せず、頑張りましたまえ」

そう言い残して先生は去っていった。残されているのは、不機嫌そうな比企谷と雪ノ下、そして俺の三人だけである。この中で会話などあるはずもない。俺は鬱憤を吐き出すかのように、口の中の味のなくなってしまうたガムを手に持った小さい紙に吐き出した。

結局、俺はビビりなままだ

高校生というのは暇なものだ。もちろん、それは人によって異なるが、リア充ぶっている奴らとそうじゃない人の比率は3:7ぐらいではないだろうか。となると、7の方に当てはまる俺は授業が終わると一気に暇になる。このまま帰ってもいいが、今の俺にはこういうときのための居場所というのがある。担任の平塚先生に強制的に入れさせられた奉仕部という部活である。行かないとどんな目に逢うか分かったものじゃない。

という訳で、俺は奉仕部に向かった。何か目的があるわけではない。よって、今日もだらだらするだけだろう。

俺が一番乗りかと思って入ったが、中には先客がいた。同じく奉仕部員の雪ノ下雪乃である。

「こんにちは、南野くん」
「おう」

俺は小さく挨拶する。

「比企谷はまだ来てないのか？」

「そうね、まだ来てないわ。昨日あれだけ言ったのに、来れたならそれはそれで凄いなと思うけど」

そうだろうな。昨日の部活はほとんど比企谷と雪ノ下の言い争いだった。俺の入る場面もほとんどなかった。

「ねえ、南野くん。あなたはなんでこの部活に来たの？」

文庫本を読んでいる雪ノ下が声をかける。

「俺の意思じゃねえよ。平塚先生に強制的に入れさせられただけだ」

「そういうことじゃないわ。あなたも比企谷くんと同じで自己変革が必要だと判断されたから来たんでしょう。それはどの部分だと思うの？ あなた自身は」

「要するに、俺の駄目な部分を訊いていると解釈していいな？ それは」

雪ノ下は頷く。

「よし、なら当ててみるよ。初対面の比企谷の欠点をあれだけ言えたんだ。俺のも分かるだろ」

俺がそう言うと、雪ノ下は黙って考え出した。

その雪ノ下の姿を見て、どこか美しいなと思ってしまう。これであの毒舌がなくて、もう少し可愛げがあったら言うことなしなのに。

「昨日の平塚先生の言っていたことを考慮すると……。人とのコミュニケーションを恐れているということかしら？」

意外とよく見ているものだ。

「ああ。だいたい合ってる。中学の頃、俺は今とは対極的な性格だったんだよ」

あのときのことを思い出すと胸が痛くなる。

「対極的な性格？」

「ああ。誰にでも話しかけるような性格だ。今でいうリア充という奴だ。そんな性格だから、学校の行事でも重要な役割を任せられることも多かったんだ。でも、中三のときの文化祭の準備中に疲れで二日休んでしまったな。めっちゃくちや大事な時間帯なのに休んでしまったから、文化祭自体はうまくいったけど、たくさんの人に迷惑かけてさ。もちろん、俺がたくさんの仕事を背負ってたから、誰もそのことは責めない。けど、そのとき役員の一人に言われたんだ。『たかが文化祭だ。そんなに無茶する必要はない』と。その瞬間に俺は人と本気で付き合うのが嫌になってしまった」

「どうして？」

「誰かのために頑張ったところで所詮それが自分の築いてきた偽りのような友情なら意味がないと思ってる。俺が本気でも向こうがそうじゃないなら意味がない。そこから俺はどんどん孤立していったんだ。ごめんな、つまらない話だったな」

俺は頭を下げる。

「大丈夫。あなたは比企谷くんと違って自分の根本的な悪いところも理解しているもの」

真っ直ぐな表情で話す彼女を見て、この雪ノ下雪乃という人には厳しい一面よりも優しい一面の方が多いような気もしてくる。

そんな中、比企谷八幡が入ってきた。

「よう」

俺は声をかける。

「おう」

比企谷も答える。そして、雪ノ下を見て言う。

「この距離でシカトかよ……」

雪ノ下の猛烈な無視に苦い表情になる。

「変わった挨拶ね。どこの部族のもの？」

「……コンニチハ」

比企谷は苦々しいが、雪ノ下は笑顔になる。

「こんにちは。もう来ないかと思ったわ」

「べ、別につ！ 逃げたら負けだから来たただけだよつ！ か、勘違いするなよつ！」

「お前、なんで動揺してんだよ」

「動揺してねえよ……」

雪ノ下は彼の反応に興味はないようだ。

「あれだけ言われたら、普通来ないと思うのだけど、もしかしてマゾヒスト？」

「ちげえよ……」

「じゃあ、ストーカー？」

「それも違う。なんで俺がお前に好意抱いている前提で話が進んでんの？」

「違うの？」

「この二人の会話はコントみたいだな。」

「ちげえよ！ その自意識過剰ぶりにはさすがの俺もひくぞ」

「そう、てっきり私のこと好きかと思ったわ」

「雪ノ下。お前は異常だ。勘違いもいいところだ。ロボトミー手術とかしとけ」

「比企谷、ブレーキ踏めブレーキ。その辺にしとけ」

雪ノ下が恐ろしい目で比企谷を睨み付けている。

「まあ、底辺の比企谷くんから見れば異常に映るのかもしれないけれ

ど、私にとつては至極当たり前の考え方よ。経験則というやつね」

雪ノ下が自慢げに胸を反らす。

「経験則、ねえ……。そら随分と楽しい学校生活なことだ」

「ええそうね。端的に言つて過不足ない生活を送つてきたわ」

「お前さ、友達いんの？」

「……そうね、まずどこからどこまでが友達なのか定義してもらつていいかしら」

「あ、もういいわ。そのセリフは友達いないやつとセリフだ」

「つーか比企谷、そんなこと聞くなよ」

まあ、俺にも友達の定義なんてできる訳がないんだけどな。偽りとはいへ、それなりの友情関係を築いてきた俺ができないのだから、こいつらができるはずもないだろう。

「お前さ、人に好かれるくせに友達はいないとかどういうことだよ」

比企谷の言葉に少し雪ノ下はむっとする。

「……あなたには分からないわよ、きつと」

それは比企谷に向けられた言葉だが、恐らく俺も分からないだろう。

「でもさ、お前の今の口振りだと人に好かれないと思つたことなんてないんじゃないの？」

そう言うのは俺だ。雪ノ下は自嘲的に笑う。

「そう、その通りよ。ねえ、あなたたちのもし友達で常に女子に人気のある人がいたらどう思う？」

「殺す」

比企谷がすぐさま答える。

「南野くんは？」

「殺しはしないけど、仲間外れぐらいにはするかもな」

雪ノ下はうんうんと頷く。

「南野くんはそれほど悪くはないけど、排除しようとするじゃない？ 私がいた学校にもそんな人が多くいたわ。そういうた行為でしか自分たちの存在意義を確かめられない哀れな人たちだったのでしょうけど」

雪ノ下は鼻で笑う。そういった苦勞を乗り越えてきたという悲しい表情に見えた。

「大変だったんだな」

俺は具体的なことは聞かなかった。というか、想像がつく。そんな話は聞いてて嫌になる。

「ええ、大変よ。私、可愛いから。でも、それも仕方ないと思うわ。人は皆完璧ではないから。弱くて、心が醜くて、すぐに嫉妬し蹴落とそうとする。不思議なことに優れた人間ほど生きにくいのよ、この世界は。そんなのおかしいじゃない。だから変えるのよ、人ごと、この世界を」

雪ノ下は真っ直ぐな表情で言う。本当にこの人なら変えそうだ。

「努力の方向があさってにぶっ飛び過ぎだろ……」

と比企谷。

「そうかしら。それでもあなたのようにぐだぐだ乾いて果てるより随分マシだと思うけど。あなたの……そうやって弱さを肯定してしまう部分、嫌いだよ」

この人はどこまでも真っ直ぐなんだな。比企谷がくねくね曲がっているのだとすれば、俺はきつと不安定に真っ直ぐだったり曲がったりしているんだろう。それが結局、自分を苦しめている。

二人のことが分かると自分のことも少しは分かるようだ。なら……。

「なあ、雪ノ下、比企谷。俺たち三人は友達になれないかな」

「ごめんなさい。それは無理ね。この男がいる限り」

指差した先には比企谷がいる。

「また、俺かよ……」

今はそれでも構わない。でもいつか……。そのいつかに何を望んでいるのか結局俺には分からなかった。